



Title	ラオス農山村地域の生活空間計画に関する研究
Author(s)	河本, 順子
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44873
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 こう もと じゅん こ
河 本 順 子

博士の専攻分野の名称 博 士 (工 学)

学 位 記 番 号 第 1 8 7 4 5 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 16 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

工学研究科建築工学専攻

学 位 論 文 名 ラオス農山村地域の生活空間計画に関する研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 吉田 勝行

(副査)

教 授 舟橋 國男 教 授 柏原 士郎 助教授 阿部 浩和

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、近年の急速な社会的・経済的变化の中で、住生活・住空間も大きな転換期を迎えているラオス人民民主共和国において、ラオスの特徴的住生活様式、長い間培われてきた生活空間に対する考え方の変容を探り、ラオス農山村地域の住空間計画の実効性向上に資することを目的としており、以下の5章で構成されている。

第1章は序論であり、本研究の背景と目的を示し、関連する既往研究の検討を行うことにより、本研究の位置づけを示している。

第2章では、現代ラオスの農山村での住宅の形態に関する特徴を示し、その変容と今後の方向性について探るため、住宅事情、住宅タイプ、住空間に対する満足度、住宅タイプに関する将来的な志向などを分析し、現在は依然高床式住宅が主流であるものの、現地で“恒久的な住宅”と呼ばれるレンガ造あるいは高床式住宅を改修した住宅（1階部分がレンガ造で2階部分が木造）が増えつつあり、これは住民らの住宅スタイルに対する志向とも一致しているなどの結果を得ている。

第3章では、ラオスの農村開発政策とその実施環境、政策的な農山村地域の生活空間設計とその実施方法のあり方について分析を行い、農山村地域の振興を総合的に推進する政策は打ち出されているものの、法的枠組みについては現状では農林業分野がイニシアティブをとって開発が進められていること、これからの村落内の生活空間については、従来の慣習的利用から個人の所有意識にも配慮した計画的土地利用・管理が計画されるべき状況になりつつあること、村落開発事業の持続性の担保には現地ニーズと社会的要請との組み合わせが有効と考えられるなどの結果を得ている。

第4章では、住民らが思い描く村落の図的特徴、そこから読み取られる意味と生活空間計画への適用性について探るため、ラオス農山村地域7村の住民によって描かれた村落現況図と将来図をもとに分析を行い、通常の図形幾何学的表現とは異なる表現例が見られる一方で、現況図については極めて現状に忠実に描いているケースが多く、それに対して将来図では特定の要素が大きく取り上げられる傾向が見られ、また、第2章で述べた住宅変化の傾向が描画においても明確に現れているなどの結果を得ている。

第5章では、本研究で明らかになった主要事項の要約を行い、ラオス農山村地域の発展過程における生活空間の変遷とその将来像の方向性として取り纏め、今後の生活空間計画策定に資する要件として提示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ラオス農山村地域の生活空間について、社会経済状況の変化に伴う住宅の形態変化と、政策と法制度から見た開発の方向性、描画を用いた住民意識の把握のそれぞれ異なる3視点から分析を行い、途上国の地域計画・地域開発のあり方について総合的に考察を進めることで将来の農山村地域の生活空間の計画を策定するための知見を見出そうとしている。その主な成果を要約すると、以下の通りである。

(1) ラオス中部地域に位置するヴィエンチャン県ヴァンヴィエン郡H村では、住宅が外観の形態的な特徴から5タイプに分類でき、総じて、住宅タイプは耐久性がより期待される方向に変化を遂げつつある。

(2) 同村低地ラオの住宅に対する満足度は、住宅建設の費用、期間、労働力、道路へのアクセスの便利さ、採光や通気性など住環境に関する事項については凡そ「満足」と「不満だが我慢できる」の間に収まるのに対して、住宅の寸法に関わる事項については殆ど「不満だが我慢できる」よりも低くなっており、水浴びや用便については最も不満と感ずる項目となっている。

(3) 低地ラオが好きだとしている住宅のタイプは、1階建レンガ造住宅、高床あるいは元高床の半レンガ半木造住宅、2階建レンガ造住宅に3等分され、この傾向は将来住みたいと思う住宅のタイプとも概ね一致するが、その理由としては「美しさ」と「耐久性」が挙げられる。

(4) ラオス人民民主共和国においては、農山村地域の振興を総合的に推進する政策は打ち出されているが、法的枠組みについてはまだ整備されておらず、各分野における一般法が個別に対応しており、その中でも農林業分野がイニシアティブをとっていると共に、農山村の生活空間については、土地に係る制度の準備が進んでおり、これまでのしきたりに基づく慣習的利用から、個人の所有意識にも配慮した計画的利用が計画されるべき社会状況にある。

(5) 村落の現況と将来像を表現させる描画法を元に、開発の計画プロセスにおいて住民参加を進めるための実用的な方法を開発し、提示している。

(6) 住民による村落現況図の多くの場合が地形や要素の位置関係を比較的忠実に表現しているのに対し、将来図では特定のモチーフが取り上げられて描かれるという傾向が見て取れ、図的表現法として将来図は現況図より近い視点を使って描かれている。

(7) 高床式住宅が現在の住宅の主流である一方、現地で“恒久的な住宅”と呼ばれるレンガ造あるいは高床式住宅の1階部分をレンガ造に改修した住宅が、将来図で増えつつある傾向が顕著である。

以上のように、本論文は、ラオスの農山村における住宅の形態に関しては新たな住宅計画の秩序が生まれつつあること、農山村地域での開発は対象域の住宅を含む生活空間全体の秩序づくりにも配慮した計画策定・実施が進められることが必要であること、開発に関する住民参加プロセスでは描画を取り入れることで対象空間の利用状況についての詳細な情報や将来の願望などが確認できることなど、今後農山村地域の生活空間の形態を計画していく上で必須の基礎的要件を提示しており、建築計画学、特に建築形態工学の発展に寄与するところが大きい。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。